公益社団法人　日本給食サービス協会会長賞

『みんなの思い』

岡山県岡山市立旭竜小学校　六年　三谷　爽佑

「一人はみんなのために。みんなは一人のために。」
仕事中、この気持ちを忘れないようにしていると教えてくれた母は、十人で約千人分の小学校の給食を作っています。母に聞くまで、ぼくは給食作りの大変さを何も知りませんでした。暑さ、寒さにたえながら時間との戦い。給食室の先生はアスリートのようです。母が給食室で働き始めてから、ぼくは給食への思いが強くなりました。まるで、母のご飯を食べているような不思議な気持ちになるからです。

ぼくは小学校で一番背が高く、何でもよく食べるので、六年間、一度も小学校を休んだことがありません。残量調査の日も大活やくします。空っぽの食缶を返した時、給食室の先生が、

「わぁー！すごい！。」

と言ってくれた言葉が、ずっと耳に残っています。

大きな声で『ごちそう様でした』を言うこと。空っぽの食缶を給食室の先生に見せることが感謝の気持ちを伝えることにつながると、ずっと思いながら、ぼくは毎日、おいしく、楽しく給食を食べています。給食のおかげで学校の授業が、がん張れています。

給食が大好きなぼくは、給食をより身近に感じたくて、給食委員会の委員長にも、ちょう戦しました。『給食キャラクターをみんなで書こう！』という、ぼくの案が校内で行われ、たくさんのキャラクターが集まり、給食にみんなで感謝する気持ちが高まりました。

給食には、ぼくのふるさと『岡山』の牛肉が必ず使われていたり、一年を通して、季節の野菜がしっかり取り入れられています。毎日、五大栄養素をバランスよく取り入れた、こん立で成り立っている給食は、すごいと思います。

ぼくは、給食のとり飯が大好きです。すごくおいしかったと母に話したら、母が家でとり飯を再現してくれました。給食のとり飯対、母のとり飯！どちらも、おいしくて引き分けの同点でした。

ぼくにとって、六年間食べきた給食、全てが大切な『思い出』であり、給食を食べる時は必ず、給食室で働く母を『思い出』します。母への『思いで』胸がいっぱいになるからです。

夏の暑い日も、長そで、長ズボン、マスクをつけて給食を作ってくれている給食室の先生のがん張りと、バランスのとれた、おいしい給食のおかげで、ぼくの健康は守られていること。これからも、給食への感謝の気持ちを忘れずに、大好きな給食との『思い出』をたくさん作りたいです。給食室の先生の思い、ぼくの給食に対する思い、みんなの思いが給食につまっているんだと思いました。